平成25年度第1回京都市図書館協議会摘録

○　日　　時　　平成25年11月27日（水）
　　10時30分～12時30分
○　場　　所　　京都市生涯学習総合センター　3階　第3研修室A
○　出席委員　　[10名中9名出席]
　　石羽　範子　委員
　　岸野　俊彦　委員
　　五島　邦治　委員
　　角谷　真子　委員
　　谷口　順子　委員
　　永田　信一　委員
　　丸尾　勝　　委員
　　柳田　典子　委員
　　山内　康敬　委員　（五十音順）
○　傍 聴 者　　なし

1　開会

（1）委員紹介
（2）中央図書館長の挨拶
（3）会長・副会長の選出
　　会長に五島委員を選出，副会長に永田委員を選出。

2　報告事項

事務局から資料に基づき，以下の項目について報告した。

（1）　図書館利用状況等について

・　昭和56年に京都市中央図書館が開館。それ以前にも社会教育会館において，本館の下京と分館の山科，南に図書室としての機能はあったが，図書館法に基づく図書館として初めて開館した。開館当初から，当時はまだ他都市では少なかった，夜間開館や祝日開館を実施。財団法人京都市社会教育振興財団（現・公益財団法人京都市生涯学習振興財団）に運営委託し，行政職員と財団職員（主に司書）とが勤務することにより柔軟な勤務形態が可能となり，夜間や祝日開館が実施できた。

　昭和59年の京都市図書館整備中期計画に基づき，生涯学習推進の最も重要な施設として図書館を位置づけ，1行政区に1図書館の設置に加え，概ね市域の半径2㎞圏内に設置するよう整備を進め，平成9年の醍醐中央図書館の開館をもってこの計画は一旦完了した。

さらに補完として，平成 10 年に久世ふれあいセンター図書館を，平成 11 年に子育て支援施設として開館したこどもみらい館内にこどもみらい館子育て図書館を開館し，平成 15 年には学校施設の地域開放の試みとして，コミュニティプラザ深草図書館（利用は地域住民限定）を開館した。現在この 20 館を京都市図書館として一体的に運営している。また山間部などを中心に移動図書館車が 42 箇所に運行し，市全域をカバーしている。

当初は 1 館ずつ独立するような形の運営であったが，平成 14 年に京（みやこ）ライブラリーネットを構築し，所蔵データ及び利用者データを統一し，全館での共有がなされた。またブックメールという図書搬送車が，毎日各館へ 5 コースに分けて運行しており，全館からの速やかな図書の取寄せも可能となり，全館の資料を最寄りの図書館にて提供できるようになった。平成 15 年に全館祝日開館実施。平成 19 年 4 月に全館夜間開館実施。

平成 18 年にインターネットによる予約サービスを開始したことで，飛躍的に利用が増加した。平成 20 年の右京中央図書館が，郷土資料を充実した京都大百科事典的図書館かつ，インターネット利用も可能な図書館として，旧右京図書館に代わりリニューアル開館した。

・ 利用状況は 10 年前に比べ，貸出冊数は 39%，貸出人数は 43%，入館者数は 23%，個人登録者数は 27%増加しており，特に予約件数は 7 倍強に増加している。来館して書架から探して借りる，という利用から，事前に予約をして，取り寄せて借りるというように，ご利用の仕方も変わってきている。だが，これまで延びてきた利用も平成 22 年をピークに，ここ数年微減傾向にある。昨年度については図書館システムの更新もあり，例年よりも開館日数が少なかったため，開館日数 2.9%減，利用者数も 3.1%減となったが，今年度も全体的に利用が少し減っている。

ただ予約件数については，インターネットを利用される方が増えているせいか，増加している。

・ システム更新後，登録すれば E メールにより新着資料のお知らせが届いたり，予約方法もピックアップした本を予約かごにいれておき，複数同時に予約できたりと利便性は向上させている。また年末臨時開館の実施や，夏期の休館日のクールスポット開放も実施，さらにこれまで地域家庭文庫などを対象にしていた団体貸出のほか，もっと小規模なグループに対しての貸出にも対応できる協力貸出制度を設けるなど，より利用していただけるよう取組を実施している。

（２） 京都市図書館の特徴ある取組について

① 中学生への取組について

・ 京都市教育委員会としても，平成 26 年度に「第３次子どもの読書活動のための推進計画」の策定を予定しており，それに向けて今年度は策定会議で様々な討議がなされているところである。課題として，小学生については朝読書などの取組により，読書習慣も

ある程度あるようだが，全国的な傾向とはいえ，中学生になると学業や部活での忙しさもあってか，途端に読書量が落ちてしまう。そうした中で，京都市図書館として，中学生に対して行った取組の１つとして“ビブリオバトル”がある。

・　ビブリオバトルとは“お気に入りの本の紹介合戦”というようなイメージ。まず５名～７名ほどのバトラーと呼ぶ紹介者が，５分間でお気に入りの本について会場に紹介する。その後３分間の会場からの質疑応答があり，最終的には会場全員で投票をし，一番読みたい本“チャンプ本”を決めるというもの。中央図書館では今年 4 月 29 日に子ども読書記念事業の取組として，中学生をバトラーに迎えて実施した。

・

<ＫＢＳ京都テレビ，「ニュースフェイス」の放映>
（内容は 4 月 29 日に実施したビブリオバトルの紹介）

ビブリオバトルという名前に違和感を持たれる方もあるが，中学生にはゲーム感覚のイベントとして捉えられるようだ。４月の事業として実施するにあたり，中学生にとって人前で話してもらうということが，実際どのようなものだろうという思いがあったため，事前に中央図書館に職場体験でやってきた中学生たちに体験中に行ってもらった。その時の印象としては，やはり人前で話すのは緊張もし，滑らかに話すとまではなかなかいかず，つらい思いをさせたのではないかと思いもしたが，そんな中でも感想に，「みんなが自分の話を一生懸命聞いてくれるのが嬉しかった」と記してくれていた。職場体験では複数の学校の生徒を同時に受け入れる場合も多いが，ビブリオバトルを行った後は他校の生徒とも打ち解けるなど，本に親しむだけではなく，コミュニケーションとして大いに役立つ要素があるように感じられた。

また４月に続き，11 月にも異世代混戦バトル編として，大人３名，中学生３名のバトラーで実施した。紹介の仕方は大人がやはり上手だが，話しのうまさだけではなく，中学生ならではの熱い思いが観客の心をとらえるようだ。これからも中学生が少しでも本を手に取るためのきっかけとして，取り組んでいきたい。

・　２点目として，中学校の家庭科や学活で，母校の小学校や近隣の保育園などに読み聞かせをしに行くということが増えており，学校から図書館へ「どんな風に読み聞かせをしたらいいのか」との実技指導の依頼を受け，中学１年生の 8 クラスある学校に中央図書館と伏見中央図書館の司書が２名ずつ赴き，１人 2 クラスの指導を担当した。

当初は指導をどこまできちんと聞いてくれるか不安もあったが，概ねどのクラスも熱心に聞いてもらえ，後日，担当の先生から，指導の後は生徒たちのモチベーションが俄然上がり，特に読み聞かせの際の本の持ち方などは目から鱗だったとの，感想もいただいた。中学生たちが小さな子どもたちに対して，読む立場となり，子どもの反応を身近に感じることで絵本の魅力を発見し，また自分で読むのとは異なり，誰かと本を共有する醍醐味を持ってもらえるのではないかと感じている。

② クールスポット開放他

・　夏期の電力需要の節減のため，家庭でなく公共施設で過ごしていただこうと，京都市全体で一昨年度から取り組んでいる。図書館については今年度７月～８月の３週間にかけて休館日の火曜と第２水曜の 10：00～17：00 に実施。“開放”としているのは，貸出・返却は行わず，閲覧により館内で過ごしていただくことを目的としているため。全館 1 日あたり平均で 266 名の利用があり，これは通常開館時の３分の１にあたる。貸出・返却以外にもこれだけの図書館利用があると感じる結果であった。

・　一昨年度から年末 12 月 28 日の臨時開館を実施している。通常と変わらず良く利用していただいており，今年度も臨時開館を行い，いずれは臨時ではなく通常開館へと移行されると考える。これまでは平日にあたっていたが，今年は土曜日にあたるので，それが利用状況にどう影響するかをみていきたい。

・　図書館機能として貸出・返却だけでなく，調べ物など他都市の図書館の蔵書確認等も含めた，レファレンスにも取り組んでいる。そのような調べ物をするにあたり，特に需要の多い，京都に関する調べ物について E メールでのレファレンスを今年 11 月 20 日から開始した。来館して資料に当たる前段階の調査として有用であるし，登録者ではない遠隔地の方でもご利用いただける。図書館のホームページから，E メールでお申込みいただき，調査のうえ，図書館職員が E メールで返答する。また回答した内容についてはホームページに蓄積して，キーワードで検索できるようにする。

3　報告事項に関する質疑応答

意見：　E メールレファレンスは始まったばかりだが，京都に関する調べものとはどういったものがあるのか。

回答：　慣習・風習であったり，伝承や地名のいわれなど，他都市の方だけでなく，京都にお住まいの方でも意外とご存じないことがある。

意見：　今後は京都だけでなく，対応する分野を広げていく予定はあるか。

回答：　今のところは問い合わせの多い京都関連に限定しているが，レファレンス自体が名前も含めまだまだ浸透しておらず，今回の E メールレファレンスなどをきっかけに，宣伝していき，それに伴いサービスも拡充していきたい。

意見：　各館にもレファレンス機能はあると思うが，全館のレファレンス実績を集積し，データ化していくことも大事だと考える。また，貴重な資料などを保存していく，京都市図書館全体の保存書庫が必要になってくると思うが，そうした施設はあるか。

回答：　もともとは中央図書館で全館の集約保存の機能を有していたが，ご覧のとおり場所も狭く書架もいっぱいの状態。府立図書館で保管されているかどうかも考慮しながら，京都市図書館として向島図書館の２階に８教室分ほどのスペースを現在確保しており，重要な資料で市図書館所蔵が１冊となったような図書はそちらへ移して保管していく

という取組を進めようとしている。

意見：　ビブリオバトルはいい取組だと思うので，もっと進めていくことで参加者が増えるのではないか。学校でも進められればいいが。

回答：　少しずつ浸透してきているので，見聞きしたことや，経験したことがあるというのが広がればと思う。

意見：　中学校現場からの意見として。私自身が昨年 10 月にビブリオバトルに出会い，これは使えると感じた。どこでも気軽に参加できるのが要素。現在 7 校くらいの中学校で取り組んでいる。見学しにいくと，小グループで楽しそうにやっている。観客に見せるためのものではなく，楽しんでやることが大事。参加して楽しかったと思えること。大勢の前では話せなくても 5 人の前ならできることもある。また書物を通して自分の意見を言う形が，話す材料が決まってくるということで逆に話しやすくなる。充実感を持てるのはそれがコミュニケーションとして成立しているから。たとえチャンプになれなかったとしてもその悔しさも含めて，充実した印象が残る。

だが実際のところ，今の中学生は本当に忙しい。12 歳～15 歳の登録率が高い割に利用が少ないのもうなずける。学業，部活，友達づきあいなどで読書をしている暇がないのが実情。この生活状況が変わらない限り，中学生の読書量の大きな増加というものはないかもしれないが，少しでもこうしたビブリオバトルや朝読書などの取組によって，本を読むきっかけとなればと思う。

意見：　ビブリオバトルはどのように参加者を集めているのか。

回答：　チラシやポスター，ホームページで参加を呼び掛けたが，図書館関係者．学校関係者，参加者の関係者等で観戦者がどうしても大人中心になってしまう。中学生世代が観戦者としてもっと参加してくれればいいのだが。

意見：　今年新たな小学校へ赴任したばかりだが，こちらが何か言う前から，すでに今年の読書週間の予定にビブリオバトルが入っていた。また，近隣の中学校がその通学圏の小学校３校に読み聞かせに行くことが 8 年間続いている。教諭による朝読書や読み聞かせも続いており，取組がしっかり根付いているのはうれしいことだ。

また，図書館でパスファインダー（調べ物の手引き）を作っていただいているが，これもとても良いと思う。学校図書館支援員や専任司書教諭に図書館のパスファインダ―の有用性を指摘すると，だんだんと作ってくれるようになった。

あとひとつ伺いたいが，学校団体貸出の際，レファレンスに応じてもらえたという話と，そうでない館があるように聞いたのだが。

回答：　概ね一週間前に，学校団体についてはお問い合わせをいただくことになっているので，その時点でどんな資料が必要かを把握できれば対応している。前日や当日に急に来られると対応できない場合もある。

意見：　一週間前に申し込んでも，各自で選んでくださいといった対応だったこともあるようだ。学校図書館と公共図書館では本の並べ方も異なり，とまどうこともある。ある

程度本に詳しい者ならそれでも大丈夫だが，全く本についてわからない教諭もいるので，レファレンス対応を行ってほしい。

４　協議事項

（１）図書館利用の向上について

＜事務局から協議事項について説明＞

ご利用に偏りもあり，一層の利用向上について考えていきたい。小学生の登録率は伸びていき，中学生の登録率が最も高いが利用実態とは異なる。一旦登録すると最終利用から５年間は登録が有効となるため，小学生で登録すると中高生でも，利用実態がなくても登録者として残っているのだろうと考えている。小学生以下の子どもの貸出では，登録されている方の貸出冊数は多い。高齢者については年齢層が多いため人口当たりの利用率は低く出ているが，利用されている方はコンスタントに来館されている。来館されている方は良く借りてらっしゃるが，その間の層である 15 歳～30 歳くらいの層は登録はあっても実際の利用はあまりないのかと思う。

行政区別でみると登録率は市域外の方も含めると 30%ある。全国的平均（市域外も含め）は 26%なので，京都市は市域内の利用者に限定しても 27%あり，それなりに高いとは思うが，下京区，南区などは低い。右京区や西京区，伏見区は近くに中央館があり利用しやすいことや，地域の人口構成により児童の数が多いと親子で来られることで利用が多くなる可能性もあり，こうした環境により地域でも差が出るのかと考える。

意見：　今年４月に京都に来て，いつも近くの図書館を利用している。住所を決めるときに図書館の近くであることを条件の１つにしていた。公共交通機関を使わないと行けないところに住んでいれば利用は遠のくであろうし，自転車に乗れない高齢者もおられるだろう。

回答：　高齢化にともない，そうしたニーズもあるかと思うので，それに対応することも考える必要があるとは思っている。

意見：　一律に貸出期間が２週間となっているが，本によって貸出期間を変えることは可能か。古文書関連など学術書などは２週間ではどうにも利用しきれない。

意見：貸出期間はすべての資料で２週間だが，事前にパスワードを登録しておいていただければ，予約がなければインターネットでご自宅で延長することはできる。インターネットを利用されない場合でも，専用電話番号（音声応答対応）におかけいただくことで来館せずに延長が可能。

意見：　在宅貸出制度は運搬か。返却ポストも増えたと思うが。

回答：　業者による運搬。館外返却ポストは市営地下鉄「北大路駅」と「市役所前駅」構内に設置している。

意見：　保健所で８カ月検診に来られているお母さん方と話をすると，赤ちゃんでも０歳から図書館カードが作れて，１０冊借りられることを知らない。８か月検診で読み聞か

せを行ったりしているときにでも，図書館の広報を行えばよいのではないか。また図書館カード登録の出張をしてもらえないだろうか。カードさえ作っておけばいつでも行けるというのが図書館へ足を運ぶきっかけにもなる。若いお母さん方はインターネットは使われるので，情報は調べられるが，図書館でないと登録できないというのはなかなかむずかしい。

回答：　一斉に図書館からお話しさせていただく機会があればと保健福祉局とも話をしている。右京中央図書館などは同じ施設内の別の階に保健センターがあり，検診をされている合間に個々のお母さんとお話しさせていただくこともできたが，このような環境ばかりではない。

意見：　インターネットでの利用登録はできるか。

回答：　今のところはできない。

意見：　本に親しむ取組として，いろいろ考えていただいているが，図書館そのものの魅力の向上を考えていくことも重要ではないか。滋賀県などの取組を参考にされるなど。

　利便性としては有料化も含めて個別宅配に注目してもいいと思う。レンタル貸出のように月いくらで何度でも利用できるような。

回答：　受け取り，引き取りの際に利用者と対面し，資料の受渡しを行うということも大切なサービスと考えているが，一方でそういったニーズもある。予算面も含め研究していかなくてはならない分野である。

意見：　教育予算の中では難しいと思うので，私的な費用も含め検討できればよいと思う。

意見：　幼児と触れ合う活動は中学生の家庭科において必修となっている。その一つとして読み聞かせ体験は有意義であり，今後も図書館との連携が重要になってくると感じる。

　流通の話でいうと，コンビニを使うなど経済的には難しいだろうが，どこにでもあり近くで受け取ることができて便利だと思う。

意見：　内容的にも多岐にわたり議論し尽くせないため，今後も継続して協議したいが，利便性，図書館の魅力，年齢層の問題など，いくつかヒントとなるご意見をいただいた。これらを今後整理して協議に活かしていきたい。今回は最初であり，図書館の基本的な部分をお話しすることもあったため，今後本格的に協議していければと思う。本日いただいたご意見や提案を今後の図書館運営に反映していただけるようお願いする。